



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 4476 号 2018.7.9 発行

香取慎吾さんら、歌の売り上げをパラ団体に寄付

朝日新聞 2018年7月8日



パラスポーツ支援に約2300万円を寄付した(左から) 稲垣吾郎さん、草薨剛さん、香取慎吾さん

ボッチャ選手の杉村英孝さんに助言をもらいながらボールを投げる香取慎吾さん



元SMAPの稲垣吾郎さん、草薨剛さん、香取慎吾さんの3人が8日、障害



者スポーツを応援するチャリティーソング「雨あがりのステップ」の売上金、約2300万円を寄付した。

東京都内で開かれた贈呈式には国際パラリンピック委員会のアンドリュー・パーソンズ会長も出席し、「3人に2020年東京パラリンピックの特別親善大使に就任してほしい」と要請。稲垣さんは「パラスポーツの普及、発展を目指して、3人で心を一つに頑張りたい」と意欲を語った。3人は日本財団パラリンピックサポートセンターのスペシャルサポーター。「雨あがりのステップ」は3月19日の販売開始から6月末までに約10万ダウンロードを記録。寄付金は同センターを通じてパラスポーツの競技団体などに寄付される。



ユニバーサルデザイン調査 一宮、誰もが快適な宿に 車椅子利用者ら要望 /千葉

毎日新聞 2018年7月8日

2020年東京五輪でサーフィン会場となる一宮町の宿泊施設に誰もが利用しやすいユニバーサルデザインの視点を取り入れようと、障害のある当事者らが実地調査した。東京に比べバリアフリーの整備が遅れているとされる地方会場周辺の施設の改善は急務。調査を受けた施設は利用者の声に耳を傾けることの大切さを実感していた。【町野幸】

国土交通省のバリアフリーの設計基準では、客室50室以上の宿泊施設は車椅子用客室を1室以上設けることを義務づけている。一宮町一宮の宿泊施設「COFF Ichin

omya」は8月3日のリニューアルオープンに合わせて増築し、19室中3部屋をバリアフリーにした。五輪期間中には外国人のほか、障害者や高齢者も多く訪れるため、ユニバーサルデザインの企画などを手がける会社「ミライロ」(本社・大阪市)に監修を依頼。設計の段階から車椅子利用者の意見を取り入れた。

6月下旬には利用者に実際に部屋を見てもらい、使い勝手や快適さを調べた。2009年に交通事故に遭って車椅子を利用している三ツ木俊之さん(53)は、寝室に並んだベッドの隙間(すきま)に車椅子が入れることや、トイレの手すりの持ちやすさなどを確認し、使い勝手の良さに感嘆の声を上げた。一方、洗面台にシャワーヘッドが付属していないことから、「車椅子利用者は顔を洗う時に届かない可能性があるのでシャワーヘッドが欲しい」と要望。施工担当者はその場で「取り付ける方向で検討したい」と答えた。

客室はコンテナを活用したコテージ風という独特の造り。黒と赤を基調にしたおしゃれなデザインで、浴室の手すりも一見して福祉用とはわからない。ミライロ広報担当の岸田奈美さんは「他の施設では、むやみに手すりをつけたりした結果、病室のようになってしまっているケースが多い」と指摘する。また、バリアフリールームが障害者専用とみられるため稼働率3割程度の施設が多いといい、「誰が泊まっても快適で福祉用に見えないユニバーサルデザインの部屋を目指すべきだ」と語った。

COFFサブマネージャーの宇野智博さんは「お客さま目線で考えているつもりでも実際に使う人の声を聞かないと分からない」と話していた。

【大学発 社会をつなぐ】赤ちゃんに触れ母性に気づく学生も 地域連携に取り組む 森ノ宮医療大(下) 大巻悦子教授に聞く 産経新聞 2018年7月8日 「全学的な取り組みに広げたい」と語る大巻悦子教授



森ノ宮医療大学(大阪市住之江区)は保健医療学部看護学科が地元住民に教室を開放し、子育て支援「もりもりひろば」と介護予防教室「ほほえみクラブ」を地域連携推進支援事業として展開。専門職の教員や学生が活動をサポートする。活動の推進母体は学科内に設けられた地域連携推進委員会だ。委員長の大巻悦子教授に活動内容や意義について聞いた。

—どんな活動を行っているのか

『もりもりひろば』は看護学科が開設された平成23年に始まり、1歳半までの乳幼児と保護者を対象に開催する参加型の教室だ。助産師や保健師、看護師の資格を持つ教員が育児相談に応じ、赤ちゃんとのスキンシップをアドバイスする。『ほほえみクラブ』は3年前から月1回、地域のお年寄りを対象に実施し、認知症予防を目的に脳の活性化プログラムを行っている。いずれも学生が参加し、地域ネットワークを広げる場にもなっている

—学生が参加する意義は?

「病院や福祉施設で実施する看護学臨地実習と異なり、楽しみながら参加できて積極性や自主性が芽生える。赤ちゃんやお年寄りと直接触れ合えるのは学生にとっても貴重な体験だ。地域の魅力をより深く知るうえでも大いにプラスになるだろう」

—学生はどんな成長を遂げるのか

「例えば赤ちゃんを抱いたことのない学生が多く、乳幼児とのスキンシップを図ることで自分の母性・父性に気づく。その体験は学生が社会に出たときの看護にも必ず役立ってくるはずだ。一方で社会に出た後、現場感覚をもう一度勉強したいという理由でこの活動に参加する卒業生もいる。授業とは違い、何度でも参加できるのが特長だ」

—今後の展望は?

「現在は看護学科内の活動だが、今後は全学的な取り組みに広がっていけば素晴らしい。また、キャンパスを拠点にしたこの活動が、将来的にはさまざまな地域にも広がっていく

ことを期待したい」

ホーキング博士が遺した逆境に打ち勝つ思考 76歳で死去、車いすの天才の未来を拓く言葉
榎本 誠二：クリエイターズアイ代表取締役 東洋経済 2018年07月07日



2018年3月に死去したスティーヴン・ホーキング博士、2017年3月資料写真（写真：AP/アフロ）
難題に直面した時でも、足元を見ずに星を見上げてみよう。

—スティーヴン・ホーキング

これまでメディアや書籍などで公言したホーキングの言葉の中から101のワードをセレクトし、トランスクリプション（意識）した後、言葉の教示を解説した榎本誠二氏の著書『ホーキング 未来を拓く101の言葉』。そ

の言葉の中から5つの言葉を抜粋し解説します。

ホーキングが遺した言葉を改めて振り返る

「なんのために生きているのだろうか？」

「自分の価値はなんなのか？」

「どのように生きていけばいいのだろうか？」

「どん底からどうやって這い出したらいいのだろうか？」

こんな悩みを持ったことはないだろうか。このような悩みの解答はないのかもしれない。希望に満ち溢れた21歳でALS（筋萎縮性側索硬化症）の診断を受けた天才理論物理学者、スティーヴン・ホーキングも同じような悩みを持ったことだろう。彼は、ここからどう這い出して、偉大なる足跡を残したのだろうか。

ホーキングは、1942年1月8日にオックスフォードで生まれた。その日は、「地動説」を唱えた天文学者で物理学者のガリレオ・ガリレイの亡くなった日からちょうど300年後だった。天才は、天才と何か深いつながりがあるのか、ホーキングが亡くなった3月14日は、奇しくも相対性理論を提唱した理論物理学者、アルベルト・アインシュタインが生まれた日と同じだったのだ。

ケンブリッジ大学大学院に入学した次の春にALSとの診断を受け、余命2、3年と告げられた。『ホーキング、自らを語る』（あすなろ書房）で、「どうしてこんな目に合わなくてはならないのだろうか」と当時の心情を吐露している。

その後、「どのみち死ぬ定めなら、多少はいいことをしたい」と気持ちを切り替えた。切り替えたと言っても、割り切れたわけではなく、その運命を甘受したのだ。

愛する女性ジェインとの結婚、三人の子供にも恵まれた。

しかしその陰で、徐々に筋力がやせ細り、昨日までできたことができなくなっていく、その恐怖と隣り合わせだったのだろう。

悲劇はこれだけではない。40代半ばで音声言語能力を完全に失ったのだ。手足の自由だけではなく、声を出す自由まで奪われた。それまでは聞き取りにくいといわれても、自分の声で意思を伝えることができた。

それすらなくしたのだ。それでもホーキングは、前向きだった。難病だけではなく、宇宙という壮大な難問に向き合い、邁進していく。76歳まで物理学の世界だけではなく、政治やカルチャーなど、様々な分野で人を魅了する発言を残した。

苦しいことも、辛いこともあっただろう。しかしホーキングの発言の中には、その苦しさはみられず、そのほとんどにユーモアと哲学が入っている。

問題に直面した時、足元を見ずに星を見上げてみよう。

何事にもベストを尽くし、

どんな状況であっても、決して諦めてはいけない

これは、ロンドン・パラリンピックの開会式で世界に発信した言葉だ。涙は足元に落ちるが、顔まで足元を向いてしまえば、輝く星すら見えない。

たとえ、難題の前に心が折れそうになっても、星を見上げよう。

たとえ失敗しても、気にすることはない。

空を見上げ、諦めず、ベストを尽くせば、必ず道は拓ける。そう信じて、結果を出し続けたのが”車椅子の天才”ホーキングだ。

ホーキングは、健常者が持っていないものを持っているのではないかと思うことがある。それは、我慢強さであり、相手の立場に立ってものを考える力であり、問題に直面した時の解決能力だ。

「足元を見ず、何事にもベストを尽くし、決して諦めない」

ホーキングの、この言葉に、成功の秘訣が全て詰め込まれている。

限りある時間を有益に使うなら言い訳をしない

障害を言い訳にしてはいけない

言い訳とは、自分の怠惰な心を擁護する言葉。言い訳とは、自己成長を妨げる言葉。言い訳とは、「できない」「やりたくない」ということを正統化する理由を探すことだ。言い訳は、「やろう」と言う気持ちが希薄だからこそ生まれる。

言い訳を考えるにも、思考を巡らせ、労力を使い、そのための時間が必要となる。限りある時間を有益に使うなら、言い訳を考えている場合ではない。やるべきことができなければ、言い訳などせず、自省して次への糧とする。

これだけの難病を抱えていたホーキングが、「障害を言い訳にしてはいけない」と言うのだから、他の誰も言い訳はできないだろう。

豊かに恵まれた人生だった。

障害者は自分の欠陥に邪魔されない仕事に打ち込めばいい

この言葉から得る教訓は、決して障害者だけのものではない。どんな状況にあっても自分の長所、短所を自認し、できること、できないことを理解する。また、その長所を生かすことが社会貢献のためになるのだ。

好きなことと、自分ができることは異なるかもしれない。やりたいことと、求められることには隔たりがあるかもしれない。しかしその中で、自分の欠点によって足を引っ張らないような仕事に就くことが望ましい。障害を持っていたホーキングだからこそ、「欠陥に邪魔されない仕事」と言ったのだろう。

「脳は筋肉できていなくてよかった」と話しているように、病気により運動はできないが、脳をフルに活用することはできる。それゆえ、学者の道を選んだのかもしれない。

行き詰っても、逆上するのはよくない。

そんなときは頭でその問題を考えながら、別の作業をするといいのだ。

ときには、前に進む道を見つけるのに数年かかることもある。

どんなことでも失敗なく成功し続けることはありえない。重要なことは、失敗や物事に行き詰まった時、どのように対処できるか、だ。困難にぶつかった時、その人の人間性が現れる。

一つのことを成すために、人生の大半を費やすこともある。いや、専門家、匠と言われる人はみんな、人生の大半を、一つの分野に費やしていることだろう。もし、あなたが、抜けきれない迷路に入ったならば、逆上し、そこに座り込んでしまうのかもしれない。

そんな時こそ、焦らず、慌てず、冷静になることが大切だ。諦めるのではなく、休息をとる。人生を賭（と）してやり続けるためには必要なことだ。

たとえ、問題解決のために何年、何十年かかったとしても気にすることはない。ホーキングは、ブラックホールを研究するのに29年も費やしたのだから。

人生に生きがいを与えるものは何か

決して仕事をあきらめてはいけない。

仕事はあなたに意味と目的を与える。

もし仕事が無ければ、人生は空虚なものだ。

仕事をする上で、誰しも何かしら、悩みや問題を抱えているだろう。だからといって途中で諦めてはいけない。問題と真摯に向き合い、一つひとつクリアしていくことが自身の成長につながる。

『ホーキング 未来を拓く 101の言葉』(KADOKAWA)。

どんな難題を突きつけられても決して逃げてはいけないのだ。また一見、重荷になるような仕事だとしても、ある方がよい。なぜなら、仕事は人を成長させ、人生に生きがいを与えてくれるからだ。

想像してみしてほしい。

朝起きて、何ひとつやるべきことがない人生と、問題が山積み忙しいが生活に張りがある人生。

どちらがよいだろうか。

もちろん問題が山積みしている状態は嬉しくはないだろうが、その忙しさが、生きる意味を教えてくれることもある。



「発達障害の子」に悩む親が知りたい超基本 「ぐずる」「こだわる」「怠ける」も症状のひとつ
吉野 加容子：発達科学コミュニケーショントレーナー・臨床発達心理士



東洋経済 2018年07月08日

その困りごとを発達障害の特性として受け止めても、子どもの個性として受け止めてもいい(写真: szefei/iStock)

じっとしていられない、片づけが苦手な忘れ物やなくし物が多い、ちょっとしたことで激しい癇癪を起こす、話がかみ合わない……。これらはすべて、発達障害を抱える子どもに見られる症状(特性)。「もしかして、うちの子ども……?」と思った方もいるかもしれません。

ん。小さな頃は困りごとが多いからこそ、子どもが起こすことが「発達障害によるものなのか、そうではないのか」を見極めるのは難しいでしょう。

発達支援 15年以上の経験を持つ臨床発達心理士にして、『発達障害とグレーゾーン 子どもの未来を変えるお母さんの教室』の著者である吉野加容子氏が、発達障害の分類、特徴、診断基準など「発達障害の基本」を解説します。

発達障害とは、脳のある部分が未発達だったり、働きがうまくいかないことで起こるさまざまな状態のことを指します。原因は遺伝子の染色体異常や幼少期の脳の疾患などが挙げられますが、理由ははっきりわからないことのほうが多いです。

また、症状の度合いも軽度から重度までさまざま。代表的な発達障害は、①自閉症スペクトラム障害、②注意欠陥多動性障害、③学習障害の3つです。発達障害は右肩上がりに増えていますが、特に多いと感じるのが「グレーゾーン」の子どもたち。症状が軽いために病院などで診断がつかない子をこう呼びます。「なんとなく育てにくいだけ」だと思っても、実は発達障害のグレーゾーンだったというケースも少なくありません。

発達障害の代表的な3つの種類

代表的な発達障害の種類と特徴は下記のとおり。

①自閉症スペクトラム障害(ASD)

- ・一方的に話すなど、会話が成り立ちにくい
- ・空気が読めず、相手の気持ちや意図を汲み取れない

- ・数字、路線図などパターン化されたものを暗記するのが好き
- ・強いこだわりがあって、融通がきかない
- ・音や光への感覚が過敏もしくは鈍感

②注意欠陥多動性障害 (ADHD)

- ・落ち着きがなく、いつも動き回っている
- ・ちょっとしたことで、激しい癇癪を起こす
- ・なくし物や忘れ物が多い
- ・集中したり、注意して行動することが苦手
- ・突然走り出すなど、考えなしに衝動的な行動を取る

③学習障害 (LD)

- ・「聞く」「話す」「読む」「書く」「計算する」などの学習、習得ができない
- ・何度教えても苦手領域だけは勉強が進みにくい
- ・運動が苦手で、人の動きをまねたりすることができない

3種類に分けて紹介しましたが、この中の1つだけに悩んでいる子どもは少なく、それぞれの症状を少しずつ持ち合わせているケースがほとんどです。そのため、発達障害の症状は子どもによって本当にさまざまといえます。

あなたの子どもが育てづらい理由

発達障害というと病院で診断される重い症状だけを想像するかもしれませんが、実は「ちょっと育てにくい子」の中にも発達障害の特性を持っている子たちがいます。そのような子たちは「じっとできない」などの発達障害特有の症状はあるものの、社会に適應できないほどではないため、病院などではっきりとした診断が付きません。このような子どもたちは「発達障害のグレーゾーン」と呼ばれます。

これまで私が受けてきた相談から考えると、診断がつく発達障害の子よりも、グレーゾーンの子のほうが多いように感じます。あくまで経験による推測値ですが、グレーゾーンの子は、1クラスに10%ぐらいの割合ではないでしょうか。

グレーゾーンの子どもたちは、日常生活を送るのに問題ない知能を持っていますが、行動に特性があるため、学校生活や集団の中で苦労することが多々あります。さらに、グレーゾーンは重度の発達障害に比べると、症状が軽いため「怠けている子」「親のしつけがなっていない子」などの誤解も受けやすいのです。周囲から症状が見えにくいからこそ大変なのが、グレーゾーンだといえるでしょう。

グレーゾーンでは、特性が少し「変わったかたち」で出ることもあります。たとえば、私のもとに相談に来ていた注意欠陥多動性障害と自閉症スペクトラム障害の特性を少しずつ併せ持つグレーゾーンの男の子の場合。

この子の症状の1つに、ファミリーレストランなどの外食で、一緒にいる人同士の注文が同じになることに「強い嫌悪感」を示すというものがありました。つまり、お母さん、お父さん、その男の子、弟の4人でファミリーレストランに行ったときに、お母さんと弟の注文するものが同じになると、途端に機嫌が悪くなって怒りだし、弟をたたいたり、メニューを変えるまでぐずるといったことがよくあったのです。

これは、一見、自分勝手なワガママのようにしか見えませんが、立派なグレーゾーンの特性。自閉症スペクトラム障害の「独特のこだわり（この場合はメニューが一緒ではいけないという独自ルール）」と、注意欠陥多動性障害の「衝動性」が合わさって急に怒り出すという行動が現れたと考えられます。

グレーゾーンでは、発達障害の代表的な特性が薄まるだけでなく、このように、特性が少しかたちを変えて出てくることもあるのです。なんでもかんでも発達障害だと考え、必要以上に過敏になることはありませんが、子育ての中で「何かおかしいな」と思うことがあれば、発達障害という可能性も考えていいでしょう。

近年、発達障害の診断基準が変わったこともあり、医療現場において、発達障害の考え方に変化がありました。

以前は、「多動があったら発達障害と診断する」など、特性にひも付けて発達障害の診断や症状の重さの区別がされていましたが、ここ数年は「どれくらい日常生活で困っているか」「どれくらい社会生活に適応できていないのか」という点に、重きを置いて診断が下されるようになったのです。“社会生活に適応できていない部分があって、日常生活で困っているなら、その場合は診断をつけましょう”そういう流れになっています。

診断基準の話からもわかるように、「発達障害とグレーゾーンの境界線」、また、「グレーゾーンと定型発達（健常者）の境界線」はあいまいです。だからこそ、子どもと向き合う両親や周りの人が「育てにくい」と感じる事があつたら、問題を先送りにせず、困りごとを減らすように動くのが大切。

多少乱暴な言い方になりますが、その困りごとを発達障害の特性として受け止めても、子どもの個性として受け止めてもいいのです。そして、困りごとを解消するために使える手段があるのなら、できるだけ積極的に使ってください。特に公的な支援は一定の年齢までしか用意されていないことが多いので、受けられる内に受けたほうがいいとも思います。

「診断がついていないから」といって何もしないのではなく、今、子どものことで困っていることがあるのであれば、どんなことに手を焼いているか、不安に感じているか、その感覚を大事にし、それを解決していくことに力を注ぎましょう。



発達障害が完治することはない

発達障害はウイルスによる風邪や病気とは違い、もともとの脳の特性による部分が大きいので、基本的には完治しません。

『【発達障害とグレーゾーン】子どもの未来を変えるお母さんの教室』

しかし、程度に差はあるものの、ヒトの赤ちゃんはみな、脳が未完成的な状態で生まれ、「目に入るもの」「聞こえてくるもの」「周りにあるもの」など、自分の中に入ってくる情報を栄養にして、少しずつ脳を成長させていきます。

発達障害の子の場合は、脳の中に発達しにくいところがありますが、脳の成長が環境によりどんどん促されていくことには変わりありません。だからこそ、両親が子どもへの接し方を変えたり、子どものために環境を変えることで、それらの刺激をもとに、子どもの脳を育てることはできます。

子どもの発達を促すのに、最も効果的なのは「親子のコミュニケーション」を充実させることです。発達障害は完治しませんが、脳科学の視点からいえば、発達障害の子も接し方次第で十分に伸びる可能性があります。そのためにも何か気になることや不安があれば、できるだけ早めに対応をしてほしいと、切に思っています。

【新聞に喝！】「児相に期待できない」となぜ書かない 虐待死事件の「嘆き記事」はもうごめんだ 作家・ジャーナリスト・門田隆将

産経新聞 2018年7月8日

船戸結愛ちゃんが暮らしていたアパート前に供えられたメッセージや花=6月7日、東京都目黒区(吉沢良太撮影)

ああ、またか。そんな怒りを感じるのは私だけではないだろう。「もうおねがい ゆるして ゆるしてください」という痛ましい文章を残して逝(い)った船戸結愛(ゆあ)ちゃん(5)虐待死事件そのものではなく、その新聞報道に対して、である。〈悲痛な心の叫びを忘れまい〉(読売)〈SOS届かず〉(毎日)〈悲劇は繰り返されてきた〉(産経)...と新聞各紙には“いつもの”嘆き記事が並んだ。

ウサギ飼育用のカゴに監禁されて死亡し、遺体を川に流された3歳男児の東京都足立区・うさぎケージ虐待死事件(平成27年発覚)



のときも、山中から男児（3）の白骨死体が見つかった大阪府堺市・虐待死事件（28年発見）のときも、同様の記事が並んだものである。虐待死事件のたびに、新聞は同じ論調を掲げ、識者のコメントを紹介し、事件を「嘆いてみせる」のだ。

血の繋（つな）がりがない33歳の父親に結愛ちゃんがどれほど虐待を受けていたかは、最初の一時保護、そして2度にわたる父親の傷害容疑の書類送検、その後の病院による児童相談所への通告（痣（あざ）の発見）でも明らかだった。それでも東京に引っ越した一家に、品川児童相談所は及び腰で、家庭訪問した際、母親に「関わらないでください」と言われると退散し、警察への情報共有も怠り、最悪の事態を迎えたのだ。

私は、同様の事件はこれからも起こり続けると思っている。なぜなら「児相の職員を増やせ」「専門性のある職員をもっと」と、同じ意見が“いつものように”叫ばれるだけだからだ。

新聞はなぜ問題の本質を突かないのだろうか。それは、「もはや児相には期待できない」ということだ。児童虐待防止法には、児相による自宅立ち入り調査も認められており、その際、警察の援助を求めることもできるようになっている。だが、児相はそれを活用しない。なぜか。

それは職員の能力と意欲の問題であり、一方で「プライバシー侵害」やら「親の権利」を振りかざす“人権の壁”への恐れがあるからだ。子供を虐待死させるような親は、人権を盾に抵抗し、あらゆる言辞を弄して子供への面会を拒む。この壁を突破して子供の命を守るには、逆に、児相に「案件を抱え込ませてはならない」のである。

警察を含む行政組織が全情報を共有し、例えば“街の灯台”たる交番のお巡（まわ）りさんが、絶えず訪問して子供の顔を確認するようなシステムを構築しなければならない。

しかし現実には、児相や厚労省は職員の増員を求めるのに必死で、虐待情報の共有に否定的だ。彼らにとっては、自らの権限拡大の方が大切なのだ。こうしたお役人の言い分に目を眩（くら）まされているのが、小池百合子都知事であり、安倍晋三首相にほかならない。新聞はなぜここを突かないのか。どれほど犠牲者が出ようと他人事（ひとごと）のような“嘆き記事”をいつまでも読まされ続けるのはご免こうむりたい。

【プロフィール】門田隆将 かどた・りゅうしょう 昭和33年高知県出身。中央大法卒。作家・ジャーナリスト。最新刊は、『敗れても敗れても 東大野球部「百年」の奮戦』。

<西日本豪雨>不明の男性、遺体で発見・伊万里 長崎県松浦市の海岸で

西日本新聞 2018年7月8日

記録的な大雨に見舞われた6日に行方不明となっていた佐賀県伊万里市の男性（20）が8日、長崎県松浦市今福町滑栄免の海岸で遺体となって見つかった。長崎県警松浦署は死因などを調べている。

男性は6日、伊万里市黒川町の知的障害者通所施設「椿作業所」にいたが、同日午後2時50分ごろ、行方が分からなくなった。施設の職員や警察などが付近を捜索、7日に施設近くの川の下流で男性の上着やズボンなどが見つかった。

松浦署などによると、捜索に加わっていた第七管区海上保安本部のヘリが8日午前1時半ごろ、海岸に打ち上げられた男性を発見、通報した。男性は既に亡くなっていた。

施設近くの川は伊万里湾に流れ込んでおり、発見場所はその河口の向かい側にあたる伊万里湾の西側に位置し、施設とは直線距離で7キロ前後離れている。



月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も
大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行